

一般部門／写真系

審査評

「緊急事態宣言」の発令に伴い、昨年につき本展審査会は中止、急遽 Web 公募美術展が企画された。通常とは異なる制限された応募規定でさらに公募期間が短かったにも関わらず、147 点もの応募が寄せられた。なかでも 10 代からの応募が多く見受けられたことは、今後の県展の発展に希望を与えてくれた。

応募された作品内容は多岐に亘りながら、撮影者が伝えようとした意図や感動が確認でき、楽しい審査となった。

時世柄、お祭りや民俗行事等に取材した、躍動感溢れるスナップショットが少なかった反面、家族や風景、人生や季節の機微に向き合った印象的な表現に数多く出会えた。

大賞を獲得した《最後の見送り》は、構図に多少の難を感じないでもないが、それでも毎年桜の時期になると誰もが感じるある趣の情感をリリカルに表現している。優秀賞に選ばれた二点については、安定した構図やプリント技術の高さは確認できるものの、何か物足りなさを感じる。奨励賞の《X スポットを走るディーゼル機関車》や《春の競演》に関しても、光や色彩の冴えを強調しすぎた一面が気になる。優秀賞の二点と同様、撮影者が「見たいもの」を強調した「絵作り」に執着したことが要因かもしれない。

今日のコロナ禍をテーマにしたものも数点寄せられたが、奨励賞に選ばれた二点は、着眼点や発想に於いて優れていた。《閑散（コロナ禍、駅頭にて）》では階下の庇を透して行きかう人々の「寄る辺なさ」を表現している。マスクを着けて食卓を囲む祖父母と姉弟の姿をモノクロで処理した《味のある生活》は、タイトル通り現下の生活をコミカルだが的確に象徴している。

尚、今後は以前にも増して旺盛な取材と撮影に出掛け、また銀塩写真や組み写真等、新たな表現を試みるなど、更なる意欲的な表現が現れることを心から期待しています。

(名古屋市美術館 学芸員 竹葉 丈)